

う主婦のテレビ会議実現。相手は、ハワイのお母さんたち。清水のお母さんたちは英語は得意ではないけれど、その分、テレビ会議当日のプログラム内容は事前に e-mail でばっちり説明済み。各自、自己表現の方法は、日本語でする人あり、苦心惨憺の英語の人あり、イラストの人ありで、バラエティに富んで楽しい。

会議終了後の感動、これは仲間と一緒に「素晴らしい体験」が同時にできたことへの満足感。みんなと一緒に世界を体験するのは面白い！ 主婦にだってやる気とメールのできる PC があれば、国際交流も簡単。それにしても、世界は狭くなったものです。

4. インターネットで会議

メールで打ち合せの通り、先方の IP アドレスを入れて待つこと数秒、ハローの音声と共に、スクリーン上には日本の反対側アルゼンチンの友人の顔。

私の映像は子画面の中にある。襟元につけたマイクではこちらの音声が割れて聞こえるので離れてみてと言われ、丁度、目先にあるノートパソコン蓋の上端に小さなマイクを挟んでみる。よしよし、いい感じ。画面では友人の後ろに珍しがって人が集まっている。ウーン…128k ではやはり、音声面で快適な会話とはならない。チャットに切り替える。文字入力での会話である。

話題が尽きて、さて次はなにで遊ぼうか…ホワイトボードに変えよう。シェアリングにすると、一つの白い画面を共有して双方で描くことができる。私が女の子の顔を赤いチョークを持って描くと、彼女は黒いチョークを持って、その子の耳に大きな丸いイヤリングを書き足す。橙色の文字チョークを手に、短い詩を女の子の側に書いた。彼女も興に乗って黄色の2行の詩を添えた。一寸、いい感じ。捨てるのが惜しくてセーブする。マイクに向かって“Good Bye. See you again soon!” 画面の彼女が手を振る。インターネット接続をオフ。通常のメールに、アナログの彼女の笑顔が加わったようで気持ちがいい。

別の日、相手はハワイ大学ラボ校のジョン先生。待ち合わせ場所に彼のアドレスを見つけてクリック。共同でやっているプロジェクトの最近のハワイ側でのプレゼンテーションを見て貰いたいという。同じくホワイトボードを使う。ジョン先生はパワーポイントを立ち上げて、そのプレゼンテーションをホワイトボード上に載せる。それを私も一緒に見て、こちらからも動かす。双方でスクロールしながら質問をし説明を受ける。

ウーン！使える！事前にこちらの写真や資料を用意しておけば、この画面上で、必要な箇所に挿入することもできるかな？次回に試してみよう。碁盤の線を引けば、五目並べかオセロゲーム。ゲームソフトを載せて一緒にゲーム。5線を引いて一緒に音符を。互いに話し言葉・書き言葉は違ってても、音符・描画は誰でも使えるツール。面白いやろなあ。

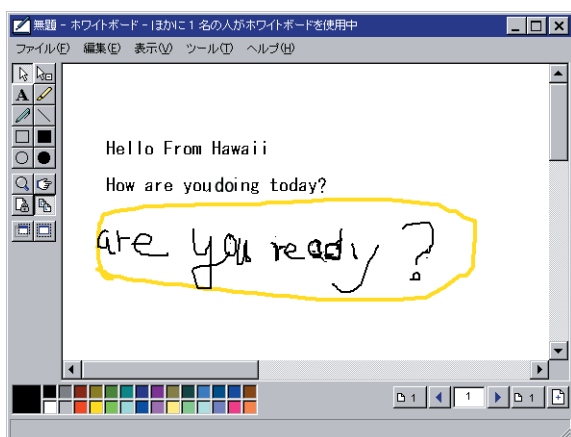
やがてジョン先生が消えて、日本語学科を取っている学生に替わり、日本語でホワイトボードに書き込んでくる。はいはい。今、書きますよ…といった案配で1時間はアツと言う間。

この1時間をISDN回線使用の国際テレビ会議にすると、回線料が約2万3千円。インターネットは市内のプロバイダアクセスポイントまでで1時間の市内料金だから、回線料が恐くない。

今回はマイクロソフト Net Meeting 3.01を使用した。他に多地点でできるCU-See-Me が一般的に使われ



Netmeeting で交信



リアルタイムでホワイトボードにかき込み

ている。パソコンにカメラとマイクを取り付けてインターネット接続し、会議用ソフトを使うと、リアルタイムのビデオ会議ができるという訳である。

5. パソコンで高齢者ネットワーク

大阪市生涯教育シルバーボイスで“私の生きがい「70才の挑戦」”で佳作を頂きました。多くの友人から祝福やら激励やらを受けて、おっちょこちょいの私は、21世紀を生きる高齢者の私達が、パソコンやインターネットの言葉が日常的になっている現在の情報化社会の孤児にならないために、「高齢者のためのパソコン教室」を考えました。

しかし世の中の数多くあるパソコン教室は、高齢者にとってどれも参加し難いものばかりで、しかも世間ではパソコンは年寄りには“絶対”難解で無理と決め付け、たまに高齢者がインターネットでホームページを開くと、新聞紙上を賑わすニュースになります。なるほど機械の仕組みが複雑でとっつきにくいパソコンですが、これは高齢や障害による能力を補い、可能性を広げてくれる道具なのです。

そこで「高齢者に分かり易く覚えられるシステム」を考えて、パソコンボランティアの力を借り、3ー4名の学習者に1人のボランティアサポータを付け、講師の説明と高齢者向けのカリキュラムで、マスターしていくシステムを作りました。そして開講したのが、この変てこりんな「大阪弁一飛び交うパソコン教室」でした。

「さあ、時間です。授業を始めます」一瞬みんなに緊張が走る。「アー、先生。一寸待って頂戴んか。このゲーム片づけまっさかいなあ」画面に顔をくっつけながらマウスを動かすSさん。呆れ顔の先生。進む授業のあちこちで「わからへーん！」「キャー！どこかへ消えてしもた」。その度にサポータが走り寄る。孫のようなチャパツの彼・彼女。無言でキーを直して、にっこり。生徒もホッと「おおきに」と頼りにする。

難しいパソコン用語に「先生、それって日本語でなんちゅうの」と大阪弁。「名古屋でわーア、それは困るんだらーア」先生のお国言葉に教室は一瞬、笑いの渦である。こんなパソコン教室、どこ探してもおませんわな。

週末が待ち遠しいお笑いパソコン教室と称しています。

でもローマ字変換・カタカナ入力、この年になっての横文字はつらい。英語は敵国語として、まともに英語教育を受けていない私たちの世代は、拒否反応を起こして「難しいわあ」を連発しながらも、ゆっくりゆっくりマスターして、インターネットに e-mail を送るところまで辿り着きました。マウスも触れなかった一期生が半年の修練の結果、新入生のサポートができるようになり、趣味のレシピをワードで綺麗に制作して見せます。

高齢化の進む中で、少子化世代の若者と、一つの教室でパソコンを通じて、心暖まる交流が始まりました。初め高齢者との接し方に戸惑いを見せ、無愛想な態度であった彼等にも、今では現代っ子生活を垣間見て理解できる気がします。頑固者の生徒（平均 60 才・最高 75 才）と現代っ子のペアによる「一寸、にいちちゃん、教えてんかー」も懐かしい風景となりました。その中の一人は、今、大学でコンピュータを教えています。私達にも予備知識として、コンピュータの基礎知識とトラブルシューティングを分かりやすく教えてくれます。まだまだ、この世は捨てたものではないですね。

パソコンは独り暮らしの私達には、楽しい遊び道具です。「老人ホームへはパソコンを持って入りましょう」を合い言葉に、教室の数も増えています。



6. インターネットでカウンセリング

〇くんは中学校の3年生です。

お父さんが仕事で使っているパソコンを小学校の6年生くらいから時々さわって、インターネットを使うようになりました。

最初はwebを見たり、広島にいるおねえちゃんとメールで喧嘩をしたり、家族の掲示板に時々書き込む程度でした。

Tくんとの関係

中1のころ、一人で席に座っている子がいました。気の優しいT君に声をかけ何かと話をするようになりました。ところがどういう訳かT君は学校に来なくなってしまいました。電話で話してみると友達にひどいことをいわれ、さらに意地悪もされていることが分かりました。

「学校に行きたくない、そんなことを思っていると体がうごかなくなってしまったんだ……」

「とにかく学校にきたら……」と何回も誘いました。その言葉に従ってTくんは学校にも来たのですが「周りが怖い」という結果しか出ませんでした。お医者さんにも通い治療も受け続けたのですがまた学校に来なくなることが続きました。

不登校についてはふれず、とにかく趣味・ゲームなどについて話しました。

インターネットでカウンセリング

T君とは電話で話し相手になると同時にインターネットを使ってメールも送りました。

T君は最初はパソコンなど持っていませんでしたが、僕がインターネットをやっていることを知って自分で本を読んで見事つなげました。

メールでT君は悩みを書き続けました。どうして学校に来れなくなったか、リハビリを受けていることなどです。

とにかく理由を付けて、学校へ来るように説得しました。「家で一人であるより、学校に来た方が楽しいし、みんなも暖かく迎えてくれるから来た方がいいよ」「君が言っているほど学校は悪くなく、担任の先生も心配してるしとにかく学校に…」と。

週に3回くらいのメール交信を3年間続けました。担任の先生も忙しいらしく、なかなかT君の家にも行けないようでした。

長い長い期間のメールのやりとりの後、3年生になってやっと学校に来るようになりました。将来のことも気にかかったようで……でも僕たちの教室には入ることができず、別な教室に入りました。

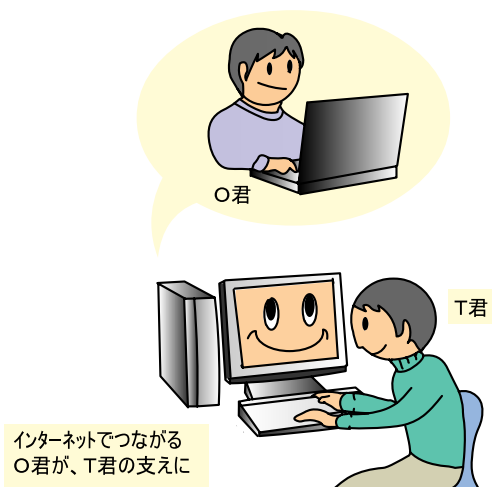
T君は今特別教室に来て高校受験に向けてがんばるようになりました。給食の時僕が運ぶ役だったし、修学旅行も僕の班で行動し、ディズニーランドではいろんなところにいきました。

インターネットがあってよかった。本音を書いてくれるし、僕も本当のことを書けるからです。

電話はだめです。声を聞くとどうしてもしゃべれなくなることがあるからです。メールだと正確に返事を書いてくれます。

先生とかお母さんに、「助けてくれてありがとう」っていわれるけどあまりピンと来ません。

ただ、インターネットがあったおかげでゆっくりと丁寧に正確にT君と話げたことは本当です。



7. インターネットがつかないだ夢

1998年の冬、アメリカからメールが届きました。その数日前に私が出したメールの返信でした。それには、“我々は、君が来ることを待っている。可能であれば来年ボストンでプレーをしないか”と書かれていました。学生時代からアルティメット・フリスビーという競技を始めて8年、世界選手権で2位に入った日本チームでプレーしていた私は、夏にボストンのクラブチームの選手に誘われていたことがずっと気にかかっていました。最初は冗談だと思っていましたが、真意を知りたくなり e-mail を送っていたのです。

アルティメット・フリスビーは、バスケットとアメリカンフットボールを混ぜたような競技で、ボールではなくフリスビーを使うところに特徴があります。アメリカには 2,000 チーム以上あると言われ、ボストンにも 60 チーム以上があります。ボストンのトップチームは全米選手権を5連覇中の強豪で、世界最強チームでもあります。“一度は最高のチームで最高のレベルの試合がしてみたい”と思っていた私は、翌年6月には会社を辞め、ボストンに住むことになりました。

アメリカでの生活の中では、練習以外では主にインターネットでメールのやりとりやホームページの作成に時間を使っていました。海外生活の中で、インターネットは自分の命綱のような存在になりました。一番の楽しみは日本の友人からの e-mail で、夜中遅くまで返信を書いていました。時差を除けば、ほとんど日本にいるのと変わらないやりとりができるので、アメリカにいる実感がなくなる思いがしたくらいでした。私は仕事でもパソコンを利用していましたので、抵抗無く日常生活でも使うことができたのですが、私が渡米することになって連絡のために両親もパソコンを購入し e-mail を使うことになりました。今のパソコンは本当に簡単になっていて、まったくの初心者であった母親もメールを頻繁に送ってきました。国際電話と違いどこに送っても金額は変わりません



し、英語をしゃべる必要もありません。このほうが確実に連絡が取れると感じたようでした。日本にいるときよりも両親とは連絡をよくとっていたように思います。お互いの日々のいろいろな出来事などを e-mail でやりとりしていて、アメリカに来て親子のコミュニケーションが増えるとは思議なものだなと感じていましたが、とても嬉しいことでもありました。これもインターネットの恩恵でしょうか。インターネットは、難しいものではなく、生活を便利にしてくれるものであり快適にしてくれるものなのだと実感しました。

e-mail と同様、日本の情報を伝えてくれたのが、日本のホームページです。アメリカにはほとんど日本の情報は流れてこないのも、毎日、日本の様子を部屋にいながらすぐに知ることができるのは驚きであり、ありがたいことでした。おなじみのヤフー (<http://www.yahoo.co.jp/>) や、日経ネット (<http://www.nikkei.co.jp/>) をよく見ていたと思います。アメリカでは、インターネットの利用は大変盛んで、航空券はすべてインターネットで購入していました。格安チケットを入手できますし大変重宝しました。チケットは自宅に郵送されて来ますのですごく便利。最近では日本でも、楽天市場 (らくてんいちば、<http://www.rakuten.co.jp/>) のようにインターネット通販がどんどん利用されるようになってきています。このサイトでは、パソコン、本、CD、チケットから保険まで幅広い分野の商品を購入することができる上に、格安情報、オークションなどもあります。インターネットの魅力を味わえるサイトだと思います。

このようにインターネットはコミュニケーションの手段、情報収集の手段として非常に優れていますが、それに加えて簡単に情報を発信できるという点でも優れています。これまでは、ミニコミ誌などでしかできなかったことも、インターネット上に自分のホームページを立ち上げれば簡単に情報を世界中の人々に伝えることができます。私はアメリカで自分のホームページを日記のように作っていましたが、日本の学生プレーヤーなどが多数アクセスをして来て、月に 1,500 件ほどの訪問がありました。これは、自分にとってすごく励みになることで、感想や質問を寄せてくれる日本の選手たちに返事を送るのも楽しみの一つでした。

インターネットがつないでくれた夢は夏に実現し、私はボストンのクラブチームの一員として世界選手権で優勝、念願の世界一になることができました。これほど素晴らしい道具を使わない手はないと思います。さまざまな要求にインターネットは応えてくれます。ためらわずに、まず、友達、家族に e-mail を送ることから始めてみたらいかがですか。そこから世界は大きく広がっていくと思います。

